



初学者からエキスパートまで「頭痛」に携わるすべての医師待望の日本語訳がついに

評者 | 上田剛士 洛和会丸太町病院 救急・総合診療科 部長

国際頭痛学会による最新の分類・診断基準の日本語版がついに刊行された。国によって診断基準が異なっているのは学術的に問題となるのと同様に、医師によって診断根拠が異なっているのは日常診療に混乱が生じることは想像にたやすい。本書は、頭痛診療に関わるすべての医師が手に取るべき書籍である。

専門家が集まり磨き抜かれた診断基準には多くのエビデンスや経験が集約されており、第1章では「片頭痛」の奥深い世界に感嘆する。過去には群発頭痛が代表的疾患であった自律神経症状を伴う頭痛は「三叉神経・自律神経性頭痛」としてまとめられ、持続性片側頭痛や神経性様頭痛発作(SUNA)といった疾患概念がより明確に整理された。

頭痛はコモンな症候であることから、非専門医であっても診療に関わることは多い。上記の疾患に聞き覚えのない医師であっても「一次性頭痛」の項目には目を通し、これらの疾患の特徴を知っておくことは有用である。たとえば「発作性片側頭痛」では、インドメタシンが絶対的に有効である。この疾患概念を知っていれば、無効な薬剤を多剤投与することなく、適切な治療へと踏み切ることができるかもしれない。

かゆいところに手が届く読み飽きない“分類本”

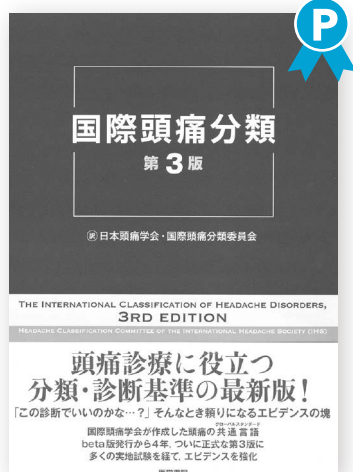
いかにも堅苦しいタイトルをもつ“分類本”であるが、「全般的なコメント」や「緒言」「コメント」が適切に読者をガイドしてくれる。またインドメタシンの日本国内での用量についての議論を加えるなどの心くばりがありがたい。

個人的には、以前に使用されていた病名を併記してくれているところが気に入っている。俗語に近いニュアンスをもつ病名であるが、アイスクリーム頭痛、ポニーテール頭痛、オルガスム時頭痛、アイスピック頭痛、「目覚まし時計」頭痛、ダイナマイト頭痛、ホットドッグ頭痛、倉庫労働者の頭痛、カクテル頭痛、二日酔い頭痛などは良いネーミングであると思う。

マイナーな疾患についての記述もある。付録ではあるが、宇宙飛行による頭痛の項では、地球上では頭痛に悩まされたことがない宇宙飛行士の71%に、宇宙飛行の期間のみ頭痛が生じたことが記載されている。

さまざまな観点から眺めても飽きのこない本書は、頭痛初学者からエキスパートまで幅広い医師に手に取ってもらいたい書籍と言える。

G



国際頭痛分類

第3版

日本頭痛学会・
国際頭痛分類委員会=訳

定価：本体 4,800 円＋税
B5・280 頁／医学書院／2018
[ISBN978-4-260-03686-3]